

講演採録

演劇を授業に導入するヒント

平田オリザ

東京藝術大学アートイノベーションセンター

要旨

本稿は、2013年に開催した国際表現言語学会第5回大会で行なわれた平田オリザ氏のワークショップ「コミュニケーションワークショップ ー演劇を授業に導入するヒントー」（2013年12月22日 四国学院大学）の講演部分を採録したものである。

Lecture Transcription

**How to introduce 'Theater' into the classroom from a communicative perspective:
suggestions from a theater professional**

Oriza Hirata

Art Innovation Center, Tokyo University of the Arts

ABSTRACT

This article is based on Hirata's lecture at the fifth conference of IAPL in 2013.

Communication Workshop by Oriza Hirata was held on IAPL 5th conference (December 22, 2013 in Shikoku Gakuin University). This paper is recorded the lecture section of Workshop.

1. 演劇を教育に取り入れる意味

演劇というのはグループでイメージを共有するゲームなんですね。

どんなスポーツにもルールと獲得目標がありますよね。サッカーは手を使わないで足と頭だけでボールをたくさん蹴り込んだチームが勝ち。お相撲は裸の男同士がぶつかって、倒したり土俵の外に出せば勝ち。演劇は、グループで、言葉と身体を使って、強いイメージを共有したチームが勝ちます。そういうゲームを2500年もやってきているために、演劇には一定時間内にイメージを共有するというある種のノウハウが蓄積されています。それがこれからのというか、今の日本の教育に非常に有効なのではないかと思うんです。

ちなみに演劇をやっても人格は高まりません、絶対に。全く関係ないですよ。だけど、要するに、ある種のノウハウを引っ張ってくると、それが教育に、あるいはその時代の教育に役立つというふうに考えないと、そこが今まで、演劇教育が学校教育の中になかなか入っていかなかった一つの大きな理由だと思うんですね。要するに「演劇をやればいいんだ」ということではないんだと思うんですね。

もうちょっとちゃんと整理すると、演劇は演劇ですばらしいんです。スポーツはスポーツですばらしいんです。だけど、別にスポーツをやったからといって、それで人格が高まるわけじゃないでしょ？ 相撲やったから人格が高まるわけではないってことは、もう私たち日本人はこの3、4年で嫌というほど見てきました。関係ないですよ。でもスポーツにはスポーツのすばらしさがあるし、演劇には演劇のすばらしさがある。それはそれで楽しみとしてやればいいし、楽しみとしてやるべきなんですよ。それを精神論と混同すべきではないんだと思うんです。

そういったことを教育の中に入れていく場合には、ある種のノウハウを抽出して、ちゃんと授業に活かしていかなければいけない。これをちゃんと切り分けないと精神論になっちゃうんだと思うんですね。それが今の時代に一番要求されていることなんじゃないかと僕は考えています。

2. イメージの共有しやすいものからしにくいものへ

ちょっと話を元に戻すと、イメージには共有しやすいものとしにくいものがある。じゃあしやすいものだけやればいいかっていうとそういうわけにはいかなくて、誰もが経験していることは逆に言えばありきたりだってこと。そんなものをお客さんはお金払って観に来てくれないんですね。お客さんはイメージの共有のしにくいものが観たいんです。普段見ることのできないものが観たい。おそらく一番イメージの共有がしにくいのは人間の心の中なんですね。みなさんも、親兄弟や恋人など、ほんとに何を考えてるかわからないですよ。だけど優れた芸術作品に出会うと、その主人公の気持ちが痛いほど分かることはよくあると思うんです。あの人はほんと悲しいんだろうな、人間はうれしいとき確かにこんなふうになるな。そこで感動するわけですね。人間の心に触れた「気になって」感動するわけですよ。しかしそれは一番イメージの共有がしにくいものなんです。そこで私たち演出家は必ず、イメージの共有のしやすいものからしにくいものにたどり着くように演劇を「構成」します。この「構成」が大事なんですよ。

僕はよくプロの俳優向けのワークショップもやるんですけど、俳優たちは上手になりたいわけですけど、しかし、「単独で上手い演技っていうのはありえないよ」って話をよくします。どんなに上手くても、そこに「構成」がなければそれは活かされないわけですね。例えば幕が上がって、大竹しのぶさんがわんわん泣いてたとしても、大竹しのぶさんは上手いから泣いてるのはわかるけど、それで感動するってことはありえない。1時間半とか2時間のドラマがあって、大竹さんがポロッと泣くから皆感動するわけです。もっと分かりやすく言えば、幕が開いて出演者全員が手をつないで「青春バンザイ！」って言ったら、これは引きますよね。

今の学生達は「引く」という言葉をよく使います。「あの教授の話、引くよね」とか。「引く」という現象は、要するにイメージの共有ができてない段階で強い主張を突きつけられると、観客の立場、受け手である学生は引いてしまうわけなんです。

逆に言うと、皆さん経験あると思うんですけど、ある程度作品の世界にのめりこんでいると、そうとうクサイセリフでも皆感動するわけです。要するにこういう状態を作るっていうのが演出家の仕事なわけです。

ここまで話せば分かると思うんですけど、プレゼンテーションもそうだし、授業の構成もみんなそうなのですよ。イメージの共有のしやすいものからしにくいものにうまく構成していくかどうかということがポイントになってきます。

舞台芸術には必ずこういう要素があって、例えばパントマイムなんかは、壁を伝うとか縄を引っ張るみたいな、動きは単純なだけで緊張感のある動きから修行に入って、最後に人間の心の中とかを表現するわけでしょう？あるいは落語なんかは、例えばおそばを食べるシーンなんかは、おそばを食べる動きが単純で音も出る、非常にイメージの共有がしやすいわけです。私たちは江戸時代の人間ではないので、「かけそば一杯十六文」とか言われても高いか安いのかもよく分からないですね。でも江戸時代の人間も私たちも、おそばを食べる仕草や、そこから出る音は共有してるので、そういうところからお客さんの気持ちを江戸時代に持っていくといったことが中に入っているわけですね。ただこれをイタリアでやっても多分ダメですね。麺類食べて音を出すことで「下品な人」という全然関係ないイメージが伝わってしまう。だから、歴史とか文化を共有してるって事も大事になってくる。

(ワークショップの活動の中で、「ボールなしでキャッチボールをする」→「ボールを使ってキャッチボールをする」→「大きなボールをイメージしながらボールなしでキャッチボールをする」という一連の活動をした後で)

今、いろいろな投げ方を工夫してくださったんですけど、最初のキャッチボールの時も皆さん工夫なさってたんですけど、そうは言っても、「はい、キャッチボールしてください」と言われて、一球目から転がす人がいたらそれはちょっと変な人だと思われてしまいますね。普通私たちは、「はい、キャッチボールしてください」と言われたら、標準的なキャッチボールをしようと思います。

でも世の中は、標準的なことだけをやってたのでは、相手とイメージの共有が図れるとは限らないってことなんですよ。いろんなイレギュラーなことを試すことによって、相手とイメージの共有が図れるんだということなんです。

3. 「どう伝えるか」が重要

俳優の仕事の一つは、自分の身体をきちんと把握してそれを再現することです。これは自分の内側に向かっていく作業ですよ。それに対して、今最後にやっていただいたの(注: 大きなボールのイメージで、いろいろなキャッチボールを試す活動)は、いろいろなアイデアを出して相手との架け橋を作っていく、外側に向かっていく作業です。この内側に向かっていく作業と外側に向かっていく作業がバランスがとれているのが、だいたいいい俳優だというふうに考えられます。

どうやればいい俳優になれるかはわかりません。でも、ダメな俳優はわかりやすく、どっちかに偏ります。ひとつは、訓練は積んでるんだけどイメージが貧困だから稽古場でつまらない奴(A)。もうひとつは、イメージイメージっていうんだけど全然訓練ができてないから再現が

できない奴 (B) ですね。どっちもバランスをとるってことが大事です。

ここまでは演劇の話ですが、よく僕が大阪大学の学生達に言うのは、皆さんもお気づきだと思うんですけど、こっち側 (A) っていうのは、大学院生、あるいは研究者にとってはコンテンツです。何の研究をしてるか、どんな研究のアイデアがあるか。で、こっち側 (B) は、どう伝えるかってことです。一般的に言って、あんまり一般化するのはかわいそうなんですけど、特に大阪大学の大学院生や研究者はこっち (B) が弱いとされてるんですね。これは大阪大学に限らず日本の研究者全般に言われていることですよね。どう伝えるかっていうのが非常に弱いわけです。

日本ではですね。特に問題なのは、「中身がよければ伝わる」ということを教わってきたんですね。「中身がよければ伝わる」っていうのは、少なくとも大学院生レベルで冷静に考えたらちょっと論理的じゃないってことはわかるわけです。だって大学院レベル、あるいは研究者レベル、国際学会レベルで「中身がいい」ってことはオリジナリティがあるってことです。理系については特にそうです。オリジナリティがあるということは、今まで誰も経験してないということです。今まで誰も経験してないということは、イメージの共有がしにくいということです。だから、中身がいいほど伝わりにくいはずなんです。イメージの共有がしにくいはずなんです。だから、中身がいいときほどどう伝えるかを考えなきゃいけないんですね。それを今まで日本では「中身がよければ伝わる」あるいは「伝わらないのは中身が悪いからだ」というふうに教え、育てられてきてしまった。本当に精神論、根性論ですよ、ほとんど。それは全く科学的でもないの、どう伝えるかってことがこれから大事なんだって話をします。

僕は特に今、理系の学生が7割ぐらいなので、例えばこういう話をします。iPS細胞の山中先生、いらっしやいますね、京大の。よく京大に残ってくださってると思いますけど、最大のライバルはスタンフォード大学なんですね。スタンフォード大学も同じようなiPS細胞の研究棟を建てました。ただし何が違うかっていうと、スタンフォードは、建てた段階で、コンピュータ・グラフィックスのデザイナーを3人雇ってるんですよ。要するに、研究成果が出る前からもう、どう伝えるかのほうをちゃんとやってるわけです。これは事情があって、アメリカの先生方はよくご存知と思いますが、アメリカの、特に理系は、寄付を集めないと研究できないので、市民とか企業の方たちに研究成果をどう伝えるかが彼らの生命線なんですね。

で、日本はまだまだのんびりしてるんで、業界の中だけで、要するに学振のピア・レビューだけ通ればいいわけだから、そうするとね、分かってくれる人にだけ分かってもらえばいいわけですよ。でも最終的にそこで大きな差が出てしまうわけです。特に日本は工業立国の体験が非常に強かったために、この20年、「私たちはこんなすばらしい技術を持っていますよ、買いたいでしよう」っていう殿様商売をしてきて、その間韓国のサムスン、インドではどんな技術が必要なのか、インドネシアではどんな商品が必要なのかということを現地で調査し、現地で開発し、現地で販売してきたわけです。勝てるわけじゃないですよ。サムスンは、そういった現地の調査開発の人間だけで三千人いるそうです。これは日本の外交官の数とほぼ同じだそうです。サムスンの中で1個外務省を持っているようなものです。勝てるわけがない。

要するに、理系ほどですね、どう伝えていくかがどんどん重要になってきている。

これは今高校教育でも問題になっていて、数年前に神奈川県にスーパーサイエンスに特化した高校ができました。僕はそこに呼ばれたことがあるんです。PTAの方に呼ばれたんですけど、何で呼ばれたかっていうと、あまりに周囲の期待が強くて、そこでのスクールカウンセラーの相談率が普通の高校の5倍になっちゃったっていうんです、3年目で。

プログラム見せてもらったら、ほんとに理系に特化した科目しかないから、ゆがみますよね、17歳とかでそんなことやってたら。

例えばMITとかハーバードとかは、大学院でアートの授業が必須なんですね。先端的なサイエンスほど発想が重要なんで、アートをやってないともう国際的な競争力がつかない。ところが今、日本は周回遅れで、今頃サイエンスに特化した、発展途上国みたいな教育プログラムを作ってるんですね。まだ欧米に追いつけ追い越せなんです、発想が。これではいつまでたっても、国際競争力がつかないし、例えばうちの大阪大学の学長が30年後に世界のトップ10に入るって言ってます。大阪大学4万人のコミュニティです。4万人のコミュニティで、劇場も音楽ホールも美術館ありません。映画館すらありません。世界中に、こんな大学はないですよ。欧米の大学からいらっしゃった方は分かると思うんですけど、ないんです、そんな大学は。それはおかしいでしょ、だってプラトンにしろルソーにしろ、教育ってのは心と身体と頭をバランスよく鍛えるのが教育のはずなんだけど、心の部分が完全に欠落してしまってるんです。身体を鍛える部分はまだありますね。グラウンドもある、テニスコートもある、プールもある。でも、心を慰めたりとか心を鍛えたりする施設は日本の国立大学にはほとんどないんです。作ってこなかったんです。これはあきらかにゆがんでいる。ゆがんだ人間を育てようとしているとしか思えない。

僕は最近毎年プリンストン大学に呼んでいただいて、講演会とかワークショップをするんですけど、今年は牧野成一先生にご案内いただいて、プリンストンに美術館があって、「ちょっと美術館観に行きましょうって」。そしたらゴーギャンとか普通に飾ってあるんですね、ルソーとか。日本だったらその1枚で地方の美術館の目玉になるものが普通に飾ってある。もちろんただですよ、大学の施設ですから。それはもう、勝てるわけないですよ。プリンストンの理論物理学の研究者大学院生は研究に疲れたら本物のゴーギャンが見られるんだもん。日本の研究者はどうするんですか、あんな殺風景な大阪大学のキャンパスで。

そういうところを変えないと。トップ30、トップ50なら入れると思いますよ、日本の大学はまだ競争力がありますから。でもそういうところを変えない限り、トップ10には絶対入れない。そこが、一番大事なんじゃないかと思います。

で、どう伝えていくかってことも私たちはやっていかなければならないわけです。

4. 日本の教育における問題点

4.1 複数の解答がある設問

PISA調査（生徒の学習到達度調査）はみなさんご存知ですよ、OECDがやっている、3年に1回、15歳の世界中の子ども達が受ける学力試験です。この試験で日本の子ども達は、読解の科目が8位から14位、14位から15位と2000年代にジリ貧になって、これが学力低下の議論のきっかけになった。

実際これはですね、参加国数がざーっと増えていった時代だったので、有意な数値で日本の子どもたちの学力が下がったわけではなかったんですね。それからですね、PISA調査は、なぜかわからないんですけど、ちっちゃな国の方が有利な点があって、日本より大きな国、あるいは人口5000万人以上の国で日本より上位になったことはほとんどないんですね。イギリスがなんかの科目で1回だけ上になったぐらいで、ほとんど上にいるのはフィンランドとかリヒテンシュタインとか極端に人口の少ないところですよ。人口が多くて上の方にいるのは韓国だけですね。韓国はそれでも4500万人。あとはシンガポールとか小さな国です。

これを逆手にとって、というか、そこを突いてトップに登場したのが中国ですよ。上海地区だけで登場した。さすが中国ですね、日本なんてそんなこと考えないですから。国で受けるものだって思ってたら、別に地域で受けてもよくて、だから上海と香港は今上位ですよ。日本もそうやって受ければ別に上位になるんですけど。

それはともかく、ただ全く問題がないかっていうとそうでもなくもありませんで、日本の子どもは白紙解答率が非常に高かったということですね。これは日本の今までの授業が、教師が正解を抱え持っていて、それを当てるような授業をしてきたので、複数の正解がある設問に対しては非常に白紙解答率が高いんですね。何を聞かれてるのかわからなくなってしまふ。それから、もちろん皆さんご承知のように、日本の教育界が今抱える最大の問題は「ふたこぶラクダ現象」、要するに本来いい問題を作ればこういう成績分布になる（注：正規分布に近い一山形の分布）はずなのが、どんなにいい問題を作っても、成績分布がふたこぶラクダ（注：勉強する子としない子に二分化した二山形の分布）になってしまふ。要するに下側の子達のモチベーションが低いということです。これに関しても、僕は2009年に文科省のコミュニケーション教育推進会議というところで座長をやっていたんですけども、文科省の方でもこういうワークショップ型の授業に注目しているのは、学力向上ももちろんそうなんだけれども、それよりもモチベーションの部分ですね、それから自尊心、自分を尊重し他者も尊敬するような感情がつくのではないか。これは実際に有意な数字としても出てきているので、こういうところで、ワークショップ型の授業で「ふたこぶラクダ現象を解消する」、下側の子達を底上げするようなことにずいぶん役に立つのではないかというふうに考えられています。

4.2 落書き問題

この複数の解答がある設問で白紙解答率が高いという中で、日本の教育界にショックを与えたのは、「落書き問題」というものです。これはもうご存知の方も多いと思うんで、ちょっと端折って説明しますが、例えば、ある人が「家の壁に落書きされて困ってる」とインターネットで投書した。すると別の人が「いやいや落書きもアートじゃないか、もっと世の中には汚い看板とかが資本の力で出されているから、そっちの方を規制しろ」という投書があった。さてどうでしょう。」みたいな設問だったんですね。設問はもっと細かい、5つぐらいあるんですけど、「さてどうでしょう」ってなこと言われて日本の子供達は困っちゃったわけです。落書きは悪いに決まってるでしょ、と思ったんですね。

僕がよく大学とかあるいは高校生とのアクティブラーニングなんかの授業のときに設問を変えて言うのは、「じゃあ、君達の家とか公共施設でもいいんだけど、落書きが許される場合はどんな場合か？」と聞くわけですね。すると当然、うーんってなる子もいるんですけど、「すごくきれいだったら」とか、「芸術的な価値があったら」とか、そんなのが出てきます。それから、これは小学生だったと思うんですけど、すごくいい解答だなと思ったのは、「あした取り壊し予定だったら」。これは発想の転換ですよ。それから、これはあんまり学生からは出てこないですけど、「商業的な価値がある」、「その人にとってだけ価値がある」、「スマップの草ナギ君が酔っ払って描いた」とか。ある人にとってすごい価値があるんですね。

で、大学生と授業していると、1000人に一人ぐらいですけど、こういう答えが出てきます。「独裁国家だったら」。要するに落書きすることでしか表現できない、命がけでそれを描いて「何とか体制を打倒！」みたいな。それを私達民主国家に生きている人間は消せと言えるかどうかということですね。

OECDがPISA調査をやるということは、要するに国家体制とか政治体制が違えば、落書きでしか表現できない人たちもいるんだということに思いを馳せる能力が要求されてるんですね。これがPISA調査の一番の眼目です。

4.3 協調性から社交性へ

今まで日本という国は、明治以降 140 年ぐらい、大きな国家目標があって、それに従って生きていけばだいたいの人が幸せになれた。私達が子どもの頃は、親や先生の言うことを聞いて、できるだけいい学校に、できるだけ安定した会社に入る、それで会社に入ったら、上司の言うことを聞いていけば給料が上がってボーナスが出て、車を買えて家を買える、そういう社会を築いてきた、つもりだったわけです。それがこの 20 年で、幻想に過ぎなかったということがわかって、これから私たちは、自分達のことを自分達できちんと決めて、その決めたことにちゃんと責任を持たなきゃいけない時代になってきたわけです。

これはもちろん日本だけのことでなくて、いろんな先進国も成長型の社会から成熟型の社会になってきたときに必ず起こる現象です。価値観がバラバラになる。

成長型の社会のときってのは、だいたい皆ライフスタイルも似てくるんです。欲しいものも似てきます。例えば自動炊飯器が日本の家庭に入ってきたときに、日本の主婦の睡眠時間が 1 時間延びたそうです。これは誰にとっても幸せなんですね。だから当時の炊飯器は大卒初任給の 3 分の 1 ぐらいの値段、今の可処分所得との割合でいうと 10 万円ぐらいしました。でもみんなボーナス出たら買ったんです。ああこれは便利だと、じゃあお父さんもちよっと頑張って働いて、次は洗濯機買おうね、で洗濯機買って、日本の主婦の手からあかぎれが一掃されていきました。じゃあ次に冷蔵庫買おうね、で、冷蔵庫を手に入れて、家庭から食中毒が一掃されていきます。このようにモノが人を幸せにした時代ですよ。で、モノが人を幸せにするから、一生懸命働いて一生懸命モノを買う、モノが売れるから、企業は利潤を上げる、企業が利潤を上げるから給料が上がる、上がった給料でまたモノを買う、これが成長サイクルです。今の中国はまさにそうですよね。

僕がよく学生達に言うのは、これが成長のサイクルだと、でも君達は、テレビが 5 センチ薄くなって幸せですか？ 幸せじゃないんですよ、かっこよかったり、便利だったりするけど、幸せとか思わないです。だから 20 万円あったら、大画面テレビを買う人もいるけど、英会話を習う人もいれば、海外旅行に行く人もいれば、ボランティアに使う人もいる。これが、価値観が多様化するという事です。もう日本はモノだけでは人を幸せにできない。

10 年前ぐらいに僕は経団連にも関経連にも呼ばれてこの話をしました。二度と呼ばれなくなりました。その結果があっのシャープやソニーの大赤字でしょ、そんなの 10 年前に素人の私でさえ分かってたこと、その改革ができなかった。あまりに工業立国の印象が強くて、変わることができなかった。

これから日本人はどんどんバラバラになっていきます。でも、人間社会はバラバラなだけでは生きていけないんですね。そうすると地域社会の中で決めていかなきゃいけないことがこれからどんどん増えていくわけです。今までは国がですね、霞ヶ関とか虎ノ門で決めていてくれたことを何となく従っていれば何となくみんな幸せになれたんですね。でもこれからはそうはいかないので、自分たちで自分たちのことを決めなきゃいけない。そうじゃないと夕張みたいに自治体でも破綻してしまう世の中なわけですね。そうするとそこで求められているコミュニケーションの質が変わってきているんだと思うんです。今までは一致団結とか心をつつという、価値観をつつにする方向のコミュニケーション能力が求められたんですけども、これからはバラバラな人間がバラバラなままでどうにかしてうまくやっていくコミュニケーション能力が求められている。で、これを私は「協調性から社交性へ」というふうに呼んできました。

だいたい作家とか芸術家というのは、子どもの頃から、「平田君はどうも自分が好きなことは集中して頑張るけれども、協調性に欠けるようです」と通信簿にずーっと書かれてきた人間が作

家とかになりますね。だから私は協調性がないんです。ほとんど好きなことしかやってこなかった。でも、演劇は集団でやる芸術なので社交性はあるんです。幕が下りるまではどんな嫌なやつとでもどうにかしてうまくやる。

もうプロの舞台なんてひどいもので、舞台上では「あなたがいなきゃ死んじゃうわ」なんてやっても楽屋帰ったらそっぽ向いてる連中ばかりです。これでもいいんです。これが社交性です。しかしこの「社交性」という概念は、今までの日本社会では、うわべだけのつきあい、表面上の交際といってマイナスのイメージだったんですね。今まで私たちはどちらかというと心から分かり合える関係を作り出してきた。心から分かり合えなければコミュニケーションではない、と教育育てられてきました。でも、もう日本人は心から分かり合えないです。…と言ってしまふとちょっと身も蓋もないんですけど。

4.4 「社交性」を養う

僕は今も小学校や中学校に行っています。三日前ぐらいは岡山県の操山中学、中高一貫の進学校です、その2週間前に小豆島に行っています。北は利尻島から、南は与那国島まで、だいたい毎年10校ぐらいは小学校、中学校に行くんです。離党の子は本当にかわいいです。今も、いがくり頭で、そういうところ行って、「はい、今日は大阪大学から平田先生が来て、みんなに国語の授業しますよ、一生懸命頑張ろうね」って紹介されて、登壇して、「心からなんて分かり合えないんだよ」。これじゃ教育じゃなくなっちゃいますからそうは言いませんが、例えば高校生とかには、こういうふうに言います。「心から分かり合えないんだよ、すぐには」「心から分かり合えないんだよ、初めからは」私たちは分からないことがたくさんありますね、パレスチナの子どもの気持ちは分からないし、イラクの人たちの気持ちは分からない。だけど、分からないから放っておいていいということではないですよ。わからない人間同士がどうにかうまくやって、最悪の事態である戦争やテロを回避する、っていうのが外交であり国際関係であると思うんですけど、これは日本はちょっと苦手なわけですよ。オール オア ナッシングになってしまう。わかるかわからないかになってしまうわけです。

協調性がなくていいとは言いませんが、日本の子どもたちは世界標準から言えばまだまだ集団性が強い方なんです。そうすると教育でプラスアルファの能力として、どっちをつけてあげなくちゃいけないかという、この「社交性」なんだと思うんですね。異なる文化、異なる価値観を持った人たちとどうにかしてうまくやっていく、最初の15分ぐらいでいいからどうにかして相手の信頼を得る、そういうものが必要なんだと思う。

僕が大阪大学に呼ばれたときに学長、副学長に言われたのは、「学会のプレゼンテーションなんかは各研究科でも教えられる。パワーポイントの使い方なんかは教えてる。でも国際学会に出て、ちゃんと友達になれる人材を作りたい」。

理系の方は分かると思うんですが、今理系はほとんどが国際共同研究なんですね。データのやり取りができないとダメなんです。というか、自分が研究しても先行研究があつたりすると自分のやってる研究が全く無駄になっちゃったりするので、だから信頼してもらってデータの受け渡しができないと仲間に入れてもらえないわけです。だから国際学会の発表じゃなくって、そのあとのレセプションでちゃんと友達ができるような、あるいは「あいつはまあまあ信頼できそうだな」と思ってもらえるようにならないといけない。理系の方がグローバル化が進んでいるので、グローバルコミュニケーションスキルがどうしても必要になってくるってことなんですね。

こうした中で、いつもPISA調査で1位2位になるのがフィンランドでした。今少し下がってきてますけど。フィンランド・メソッドという、フィンランドの国語教科書が翻訳・出版もさ

れています。特に国語教育にご関心のある方は見ていただくといいと思うんですけど、その中で注目していただきたいのは、各単元の一番最後がぜんぶ演劇的な終わりになっていることが多いんですね。「今日読んだお話の先を考えて人形劇を作ってみましょう」とか、「今日読んだ小説の一番楽しかったところを演劇にしてみましょう」とか、「今日のディスカッションを利用してラジオドラマを作ってみましょう」。集団でやる表現になってるんですね。どういうことかっていうと、フィンランド・メソッドに代表されるヨーロッパの国語教育の主流は、インプット、感じ方はバラバラでいい、民族とか人種とか宗教が違えば当然何かの物事に対する感じ方はバラバラなんだと。でも、そのバラバラの人間が社会を構成しなきゃいけないから、アウトプットは、必ず一定時間内に集団でアウトプットを出しなさい、というのがフィンランド・メソッドの基本的な考え方です。これ、日本の今までの国語教育と正反対になっていることがわかりますよね。私たちは、「この作者の言いたいことは何ですか。50字以内で書きなさい、○か×か」みたいにインプットを極端に狭められて、アウトプットは作文とかスピーチとか個別にまかせられてきたわけです。だけど、実際の社会はどっちが近いですか？ アウトプットがバラバラでいいなんて会社があったらあつげなくつぶれますよね。というか製品開発さえできなくなってしまう。でもどんな企業でも、若い多様な意見が必要なわけでしょ？ そこでは、誰がまとめたかが一番重要になるんです。

日本では、AちゃんBくんCさんDくんEちゃん、様々な意見が出て、例えばBという意見になったら、Bちゃんがほめられますね。あるいはユニークな意見を言ったDくんがちょっとほめられるかもしれない。でもフィンランドではまとめたFくんがほめられるんですね。たぶん日本で今このままこれやったら、「えっ、Fくん何にも言ってないじゃん」って言う子が出てくると思うんです。でも、何にも言ってなくてもいいんですね。まとめた子が一番評価されるんですね。実際の評価もそうになっています。

4.5 多文化共生型の授業

私たちにちょっと幻想があったんだと思うんですね。欧米ってのは個性尊重だからユニークな意見を言ったやつがほめられるんだと。でもユニークな意見が出てくるのが前提なんですね。人種も民族も違う子達が一つの教室にいるわけですから。で、誰がまとめたかが重要になってきます。

日本というのは日本語と東シナ海と荒い海という2つの高い障壁に囲まれて、明日難民が流入してくるような地理的状況にないわけです。僕はこれは天恵、天の恵みだと思っていますけど、そうは言っても30年後には確実に多民族国家にならざるを得ない。例えば、僕がお手伝いしたことがある新宿の大久保小学校は、コリアンタウンがある街ですけれども、生徒の半分が親のどちらかが外国人です。今もうこれは7割になっています。僕が行った当方で、生徒の3割は日本語を母語としませんでした。早稲田が近いので、早稲田の学生さん達なんかボランティアでずいぶん入っていて、みんな日本語がしゃべれるようになるんです。

こういう多民族化はもう始まっているってことなんですね。浜松とか太田とか行けば、クラスの1割くらいが日本語を母語としないってのはもう普通です。ただ、大久保小学校の例は皆さんの参考になるので申し上げますと、日本語教育がすごく充実していて、ま、ちょっと漢字の書き取りが苦手ぐらいの子がいますけど、6年間やれば確実に日本語は、見た目では分からないくらいできるようになります。

ところが、日本語がうまくなると、今度は親を馬鹿にし始めます。親が日本語ができないから。それから、日本はなんだかんだ言ってもやはり清潔で暮らしやすい国なので、自国の文化を嫌い

始めちゃうんですね、フィリピンの子とかタイの子とか。

それで大久保小学校は、総合的な学習の時間を使って多言語教育というのを始めました。僕が行ったときは、小学校5、6年生が総合的な学習の時間を使って、韓国語と中国語とタイ語とウクライナ語（ウクライナの子もいたので）、その4ヶ国語をいっぺんに習う。要するに挨拶程度ですけど、いっぺんに習う。それだけではなくて、地域の保護者の方に来ていただいて、タイの踊りを習ったりだとか、中国のお茶の入れ方を習ったりだとか、韓国の挨拶の仕方を習ったりしてお互いの文化を尊敬しあえるような環境を作っていくっていう授業をやってました。

僕はその最後の部分に行って、その1年間のまとめを演劇にするという授業をやったんですけど、5回ぐらいでやったんですけど、すごくおもしろくて、僕が持ってる定番のやつで「転校生が来る」っていう授業があって、中学校の国語の教科書に載ったのをやったんですけど、ある班は、ヨルダンが舞台なんですね。それは、たぶん社会科の授業で最近習ったかららしいんですけど、ヨルダンが舞台で、冒頭のセリフが「お宅のラクダの調子、どう？」「うち新しいの買ったんだよ」「じゃあ陽が落ちたらみんなで遊びに行こうぜ」みたいな。そこに韓国から転校生が来るんです。砂漠の国の子供達に韓国の話をずーっとする。だから、日本語で劇は作ってるんですけど、日本人が一切出てこないんです。それから、別の班は日本が舞台なんだけど、タイのバンコクから、やっぱり韓国の子が転校してきて、その設定は、お父さんの仕事の都合でアジアのいろんな国を回っている。だからいろんな国のことを知ってる子が日本に来たっていう設定で、いろんな国の話ができるんです。また別の班は、アメリカが舞台で、ウクライナから転校生が来て、話してるうちに「ああ、そういえばうちの親父お医者さんだったから、チェルノブイリのときボランティアで行ったんだよ」って原発問題の話をする。10年前ですよ、福島の話のずっと前です。

多国籍多民族で作ると本当におもしろくて、パフォーマンスが上がる。要するに、こういう要素を、マイナスとして捉えるのではなく、どうやってプラスに転化させていくか。日本の場合はさっき言ったように今すぐ難民が入ってくるお国柄ではないんですけど、ヨーロッパの人たちはほんとに大変ですよ。アラブの春とかあると、いかだで2日ぐらいで渡って来られるので、どんどん入ってきちゃうんですね。日本はそういう国ではない。でも逆に言うとこんなにほぼ単一の民族、ほぼ単一の文化、ほぼ単一の言語でやってきた国に1割2割の外国人が入ってきたときに、このままではたぶん日本社会は持たないですよ。皆さんもお分かりになると思うんですよ。今のヘイトスピーチのあの雰囲気から見て、大変な人種差別とか、大変な市民社会の分断とかが起こってしまうと思うんですね。今からでも、20年後30年後に備えるためにもこういった多文化共生型の授業をしていかないと、たぶん、2、30年後に日本社会は大変な時代を迎えるんじゃないか、ということなんです。

PISA 調査が求めているのは、そういう多文化共生型の社会、どんな組織、どんな会社、どんな国家も、様々な民族、様々な文化、様々な宗教が混在していたほうが、最初はちょっと大変だけれども、最終的には持続可能な社会になります。生物多様性と一緒ですね。いろんな種がいたほうが全体の利益になるんです。だから、「最初はちょっと大変だけれども」の、その「最初の大変さ」を乗り越えるような力を子供達につけてくださいっていうのが、PISA 調査が一番求めていることです。であるにもかかわらず、文科省のほうは「ああ一大変だ、学力低下だ」って言って授業のコマ数だけ増やして、せっかくできた総合的な学習の時間を減らして漢字の書き取りとかをやらせてるわけですね。これはトンチンカンというよりも鎖国状態になってるんですね、今の日本の教育政策というのは。今の政権はこの鎖国状態をもっと加速させようとしています。これは今後非常に大きな問題になるんじゃないかと思っています。

特に、合意形成能力とか、人間関係形成能力といったものが、演劇とかワークショップの授業

では培われていくのではないかと考えられています。

ここまで話すと、日本の先生方は真面目だから「ああ、金子みすずですね、“みんな違って、みんないい”ですね」って言うんですけど、そうじゃなくって、“みんな違って、大変だ”と言いたいですね。大変だから、これをどうやって乗り越えるか、っていう能力をつけていく。“みんな違って、みんないい”ならもう楽ですよ、そりゃ。そうじゃないですよ。みんな違って大変だから、どうにかする。このどうにかする力が、演劇では一番つくんじゃないか、というふうに考えています。

5. コミュニケーション教育の普及のために必要なこと

この学会（国際表現言語学会）は、今まで演劇とか演劇的手法を使って言語教育をなさってきた先生方をバックアップするというのが学会の一番の主旨なので、そこで、特に今回は日本で開催していますので、日本社会の中、あるいは日本の教育界の中にどうやって受け入れてもらうかってことの、説得力のある説明をしていかなきゃならないわけです。「なんか子どもは楽しそうにやってるけど、本当に学力ついてるの？」っていうのが今までの風潮だったと思うんです。でもこれは今は一変しましたよね。こういうことが必要だってことは、相当理解は深まった。本当に10年前、15年前に比べると、明らかに雰囲気は変わってきました。ただやっぱりもう一押しは必要なんだと思いますね。それはやはり私たちやっている側がきちんと説得できること、データであったり他地域の成功体験であったり、いろんなことがあると思います。

例えば、兵庫県伊丹市は小学校で言葉科っていうのを作って、週に2コマ、国語以外の言語活動というのをしています。で、教育委員会に、2人の専門の教員を置いて、各校に行って、プログラムを決めて、もちろん演劇もやるんですけど、落語をやったりとか、学校によっては漫才をやったり、写真に俳句をつけたりとか、いろんなことをやっています。伊丹市はアイホールという非常にいいホールを持っていて、そこからプロを派遣したりもしています。7年目なんですけど、必ず数校あった学級崩壊がゼロになりました。それから、去年は中学校に行ったんですけど、中学の校長先生に聞いたら、言葉科は小学校でしかやってないんですけども、中学も落ち着いてきた。以前はその中学校も荒れてて、廊下でゴロゴロしている子どもとかがいたんですけども、全くなかったと。その校長先生に言わせると、学校に来てまで廊下でゴロゴロしてるってのも、子どもにとって表現なんだと。なんか表現したいからゴロゴロしちゃうんですね。だけど言語、言葉によって何か伝えられるようになると、子どもは落ち着くって言うんですね。要するに、しゃべれるようになれば人間は相当落ち着くんですね。やはり言語活動ってのは人間にとって一番重要なコミュニケーションの手段なので、その回路がひらけていくとイラついたりキレたりする確率が格段に減っていくということですね。

こういう成功例をたくさん積み上げておくことが必要だと思うんですね。あるいは愛媛県西条市、ここはコミュニケーション教育を小中で全部やってくさっているんですけど、ま、学校によって温度差があるんですが、すごく熱心な校長先生がいらっちゃって、小学校5年から6年、1年半に渡って、コミュニケーション教育を集中的にやる。学校行事の中にも入れ込んで、アーティストを東京から呼んでやるんですね、それでコーラス大会の前、運動会の前、学芸会の前に、ピンポイントに、一番有効だと思います。で、1年半の学習目標が「聞く力を育てる」っていうのをずっとやってきたわけです。最後のフィニッシュが、愛媛県の小学校なんで、広島に行くわけですね、修学旅行に。そのときに、広島の実験者の語り部の方から、「こんなによく話を聞いてくれた小学生は初めてです。来年も私を指名してください」と言われたそうです。この活動の成果がはっきり現れている例ですね。そういう定性的なものから定量的なものまで私たちはデー

タを蓄積して共有して、説得していかなければいけないんじゃないかなと思います。

6. 「遊び」の中でコミュニケーションを学ぶ

最後に、「なんで学校で？」ってことなんですよ。

大阪大学でこういう教育をやっていると、風当たりもあるんです。特に、大学院でやっていますから、「遊んでるだけじゃないか」とか。まあそりゃそうですね、大学院生に演劇やらせてるんですから、遊んでるに決まってるんですけど。「大学院は教養を身につける場ではない」と公言なさる先生もいらっちゃって、こういう先生はまだいいんですけど、「そういうものは現場で身につけたものですけどな、アッハッハ」みたいな人がいるんですね。そういう先生ほどコミュニケーション能力がないんです。

その「現場」っていうのは2つ問題があると思うんです。一つは、その先生がおっしゃっているコミュニケーション能力は、要するに上意下達型の、昔の医学部とか工学部の、「俺の後姿、背中を見て学べ」みたいなものです。でも今、子供たちに必要なのは、世代とかジェンダーとか国籍を越えて、対等な関係で議論ができる能力です。僕は「対話力」と呼んできました。そういうものを学校として、プログラムとして教えていかなければいけない。

もう一つは、少子化や地域社会の崩壊などによって、現場がなくなってしまってるんですね。例えば大阪大学で25歳くらいの医者とか看護師さんの手前ぐらいまでで、身近な人の死を一度も経験したことがないという学生はたくさんいます。これはしょうがないんですね。おじいちゃんやおばあちゃんが亡くなっても、一緒に暮らしていたかどうかでずいぶん違いますから。私たち市民からすれば、身近な人の死を一度も経験しないで医師や看護師になるのは不安ですよ。大丈夫かな、そんなことで家族や患者さんの気持ちが分かるかな、と不安がるのはいいですけど、教員の立場で、「お前、身近な人の死を経験したことないのか、そんなことで医者になれるか、経験して来い」とは言えないわけですね。これは相当ナンセンスな注文ですよ。要するに「現場で学んだもんだけどな」というナンセンスな注文を学生達に押し付けてしまっているってことですね。

今までは地域社会とか兄弟とかで普通に学べたことがもう学べない環境を私たち大人が作ってしまったんです。だとしたら、それを学校の中で学ばせてあげる必要が出てきた。僕はずっと「コミュニケーション能力というのは学校の教室で学べるものではありません。子どもが自然状態の中で、遊びの中で学んできたものです」と言い続けてきました。しかしその「遊びの場」がなくなってしまった以上は、それを、ある程度システムとして、しかしその遊びのような要素を残した、ようするに疑似体験として、学校の中でやっていく必要がある。だから演劇的な授業、ワークショップ的な授業が学校教育の中で必要なんじゃないか、というのがずっと言ってきた理屈です。だから何よりも遊びの雰囲気、楽しさの中で学ばせることが一番重要なんじゃないか。ここがこれまでの教科学習と一番違う点です。だから「遊んでるんじゃないか」というのは、「そうです、遊びの中でしかコミュニケーションは学べないんです」と私たちは強く反論していかなくてははいけない。

特に言語学習においてはですね、もう一つの命題として、こういった遊びの中でランダムに学んだ方が記憶に強く結びつくんじゃないかと。まあ、この話をする、また長くなってしまうので、端折りますが。

子ども達学生達生徒達にとって一番重要な学びっていうのは、こういった遊びの中で、あるいは楽しみの中で学んだ方が実際に身につけていくんだっていうことは、先生方もたぶん経験で分かっていると思うんです。それをこれからは、認知心理とか教育心理の力も借りて、より数字で

も表していかなければいけない時代になってきている。

今回、学会に、ほんとにいろいろな先生方に集まっていただきました。ぜひ情報交換して、現場で上司の方たちに、説得力を持って「こういうデータも出てますから、うちもやりましょう」って言えるようなデータをこの学会で持って帰っていただけるといいかなと思います。